

昭和63年8月15日全国戦没者追悼式で
お言葉を述べられる昭和天皇
日本武道館で

国民の祝日「昭和の日」が制定されて初めてのその日を迎えた、平成19年4月29日は、昭和天皇御誕生106年の佳日でもある。昭和天皇は明治34年4月29日午後10時10分、皇太子嘉仁親王（後の大正天皇）と節子妃殿下（後の貞明皇后）の第一皇子としてお生まれになり、6日後の5月5日、端午の節句の日に、迪宮裕仁親王と命名された。明治34年は西暦1901年、つまり、20世紀の幕開けの年でもあった。以来昭和64年1月7日午前6時33分、皇居吹上御所で崩御されるまでの87年にわたる御生涯は、日露戦争に始まり第一次世界大戦、シベリア出兵、関東大震災、満洲事変、二・二六事件、支那事変そして大東亜戦争、敗戦、占領等々、国内外の動乱が続き、そして戦後ようやくにして築き上げられた平和と繁栄、それは正に波瀾万丈、激動の御生涯であった。しかも、絶えず我が国の将来を思い、国民と共に在ろうとされた人間天皇の御生涯であった。

「国民の祝日に関する法律」



昭和59年1月26日御結婚60年のダイヤモンド婚を迎えられた昭和天皇・香淳皇后

この法律の文言の中に、昭和天皇のことは何も書かれていないが、この二つの祝日は正に、昭和天皇の御生涯を象徴するものと受け止めたい。

昭和天皇は、大正天皇御不豫のため、大正10年11月25日に、御年20歳で摂政に就任されたから、御在位63年に摂政御在任を加えて、67年の永きにわたり軍務を含む国務に御精励、御心労を重ねられたことになる。摂政御就任の翌々年、

昭和二年七月二〇日法律第一七八号（昭和二三年七月二〇日法律第一七八号）第二条が平成一七年五月二〇日法律第四三号により改正され、平成一九年一月一日から施行されたが、それは、「第二条みどりの日の項を次のように改める。

昭和の日 四月二十九日 激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、国の将来に思いをいたす。

第二条憲法記念日の項の次に次のように加える。

みどりの日 五月四日 自然に親しむとともにその恩恵に感謝し、豊かな心をはぐくむ。」というものである。

初の「昭和の日」

に寄せて



題字揮毫・瀬島龍三氏

第6号

財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒105-0001 港区虎ノ門3-6-8 第6森ビル5階

電話 03 (5405) 1838
FAX 03 (5405) 1839

<http://homepage2.nifty.com/ireikyoku>

振替口座 00140-6-334930

編集人 飯田正能

発行人 柚木文夫

印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

初の「昭和の日」に寄せて	1
千鳥ヶ淵戦没者墓苑拜礼式	5
第41回特攻殉国者慰霊祭	6
第十回慰霊祭（軍校七期生）に寄せて	8
協議会参加団体の紹介⑤JYMA	12
事務局からの報告	15
合同慰霊祭のお知らせ	16
新年度役員等一覧	16
新入会員及び寄付者	16

大正12年9月1日には、関東大震災が
発生、更に同年12月27日には、第48回
通常議会開院式に御出席の途中、虎ノ
門で難波大助に仕込み銃で狙撃される
という、前代未聞の虎ノ門事件に遭遇
されたが、御無事であった。大正15年
12月25日大正天皇崩御、直ちに踐祚し
て一二四代天皇の位に就かれた。御年
25歳であられた。そして大震災後の復
興ようやくとなった昭和3年11月10日、
京都御所において即位の礼が執り行わ
れたが、その年に生まれた筆者は、幼
少の頃、父母から昭和の御大礼の盛事

(11月10日の即位の礼に引き続き14、
15日に大嘗祭が行われたが、それより
先6日早朝東京を発つてから一世一度
の大嘗祭までの10日間、8千万国民の
耳目は、この莊重華麗な一大絵巻に集
まったという。)とその年に生まれ合
わせた幸運をしばしば聞かされたもの
である。その即位の大礼に臨んで昭和
天皇は、「永く世界ノ平和ヲ保チ普ク
人類ノ福祉ヲ益サムコトヲ冀フ」との
勅語を発せられた。

この勅語に込められた平和への希求
にも拘わらず、その後先の大戦の終戦
まで戦乱の止むことはなく、ポツダム
宣言受諾の御聖断を仰ぎ、昭和20年8
月15日、戦争終結の玉音放送によつて
ようやく平和な日本を築き上げる第一
歩を踏み出すことができた。

「激動の日々を経て、復興を遂げた
昭和の時代」とあるが、我が国の戦後
の復興は、昭和天皇なしには考えられ
ない。絶えず国民を励まし、国民と共
に在ろうとされた昭和天皇の御聖徳の
お陰で、敗戦により打ちひしがれた国
民は勇気を取り戻し、再び心を合わせ
て日本の復興のために立ち上がること
ができたのである。戦後の御巡幸は正
にその一端であると言えよう。
昭和21年1月1日、昭和天皇は年頭
の証書で「朕ハ爾等国民ト共ニアリ、
常ニ利害ヲ同ジウシ休戚ヲ分タント欲
ス」との、いわゆる「人間宣言」を発
せられ、国民統合の象徴として国民と
共に戦後を歩まれたのであるが、その
最も端的な表れの一つが、戦後間もな
くから行われた全国御巡幸であろう。
昭和天皇は、「一刻も早く日本全国
をまわって長い間苦勞した国民をよく
慰めてきたい、また、一人でも多くへ

地方巡幸 戦災地視察の旅 昭和21年〜29年

陛下は、昭和二十一年一月の豫奈川東から、二十九年八月の北海
道まで、総行程約二萬六千キロを精力的にまわられた。

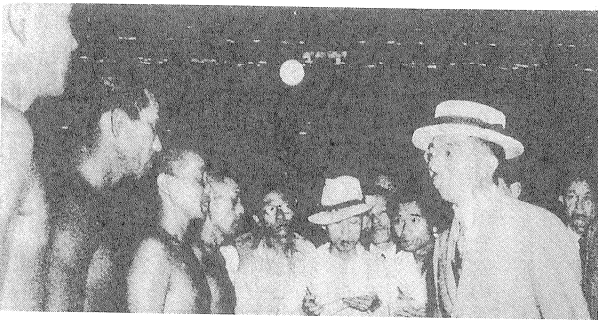
それは米軍政府の押入れをめぐり都道府県にわたった。国民の間に
は、現大正に代わる新しい、八咫天皇の像がぼやけていった。



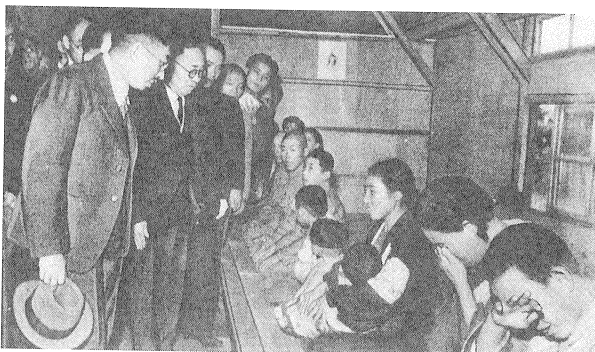
昭和21年2月19日、昭和電工川崎工場を視察。戦災地視察の旅はここが最初。庶民と話されたのもこの時がはじめてだった。



地方巡幸第1日の昭和21年2月19日、神奈川県の川崎や横浜に、いくつかの工場や共同住宅などを視察された。



昭和22年8月5日、東北の旅の初日は、福島県の常盤炭坑を視察された。温度、湿度とも高い湯本坑で、汗ばむのも気にされず、作業員を激励された。



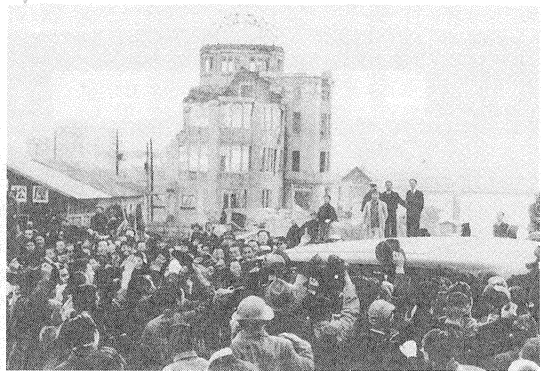
昭和21年10月22日、愛知県名古屋市中で、外地引き揚げ者名古屋寮を慰問された。



昭和24年5月20日、福岡県嘉穂郡庄内村の公民館前で。この日、陛下はボタ山の並ぶ筑豊の炭田地帯を視察された。



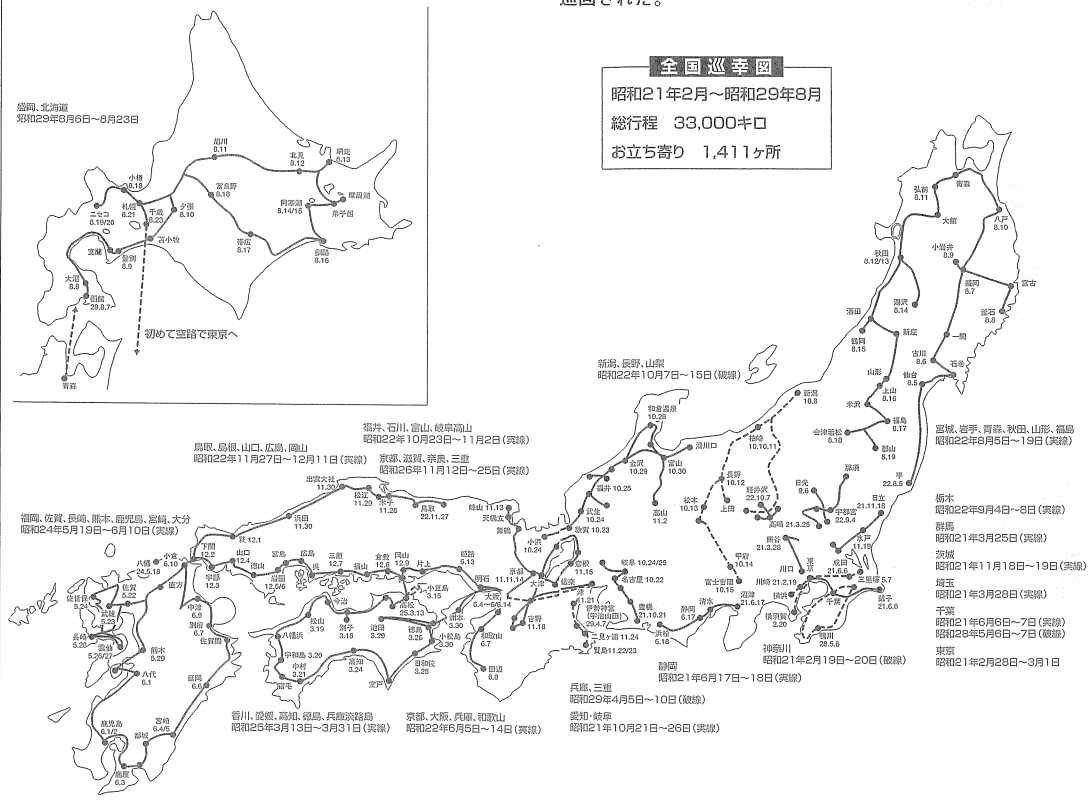
昭和24年5月29日、福岡県大牟田市の三井三池炭鉱三川坑で、切り羽に入るため人車に乗られた。



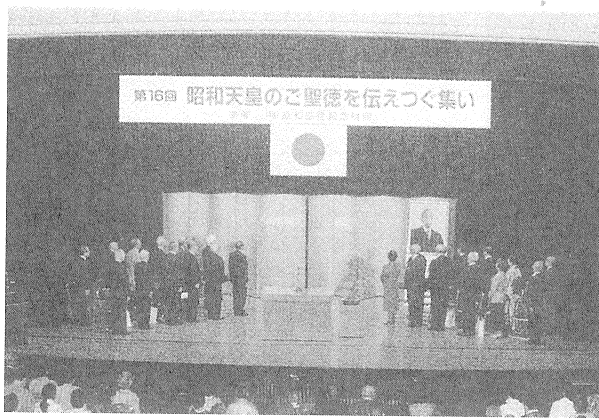
昭和22年12月7日、広島をご訪問。原爆爆心地付近で、陛下のお車に歓迎の市民が殺到した。



昭和22年9月21日、埼玉県下の水害地を視察された。利根川決壊点付近、原道村を、天皇旗を掲げた専用ボートで巡回された。



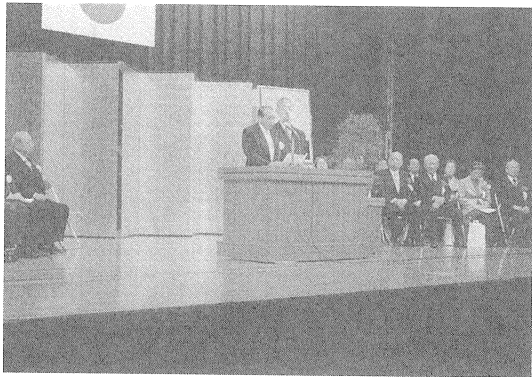
への人に来て、これからの日本再建について頼んできた」と仰せになり、昭和21年2月19日の神奈川県・昭和電工川崎工場視察から始まり（最初にこの会社を選ばれたのは、食料増産に欠かせない硫酸などを生産する最大の肥料メーカーであったからだと思われる）昭和29年8月23日の北海道月寒種羊場視察まで、途中に中断した時期はあったが、足掛け9年、総日数165日、行程は沖縄を除く北海道から鹿児島県までのすべての都道府県に及び、3万3000キロにも達している（別掲の



「全国巡幸図」参照。その際、国民が直に接した昭和天皇の親しみのある真摯なお姿とお言葉に、敗戦による悲惨な逆境の中にあつた国民が、どれほど勇氣付けられたことか。戦後復興の大きな原動力となつたことを改めて銘記し、感謝しなければならぬ。
・地方巡幸の写真は1989年1月25日発行の「アサヒグラフ」より
・「全国巡幸図」は（株）明成社発行の「昭和天皇」より

「昭和天皇のご聖徳を 伝えつぐ集い」

4月29日午後1時より九段会館にお



主催者として式辞を述べる綿貫民輔会長

いて、（財）昭和聖徳記念財団主催による「昭和天皇のご聖徳を伝えつぐ集い」が、満場の参会者を集めて、厳かに、盛大に開催された。第16回目である。昨春は、財団の「昭和天皇記念館」が立川市の「国営・昭和記念公園」内に開館し、秋には天皇、皇后両陛下がご来館になるなどした記念すべき年であったが、今年はまだ、初の「昭和の日」に当たり、意義深い記念の集いとなった。

第一部の「式典」では、参会者一同国歌斉唱の後、昭和天皇の御霊代に黙祷し、御聖徳を偲んで感謝の誠を捧げた。その後、主催者を代表して財団の

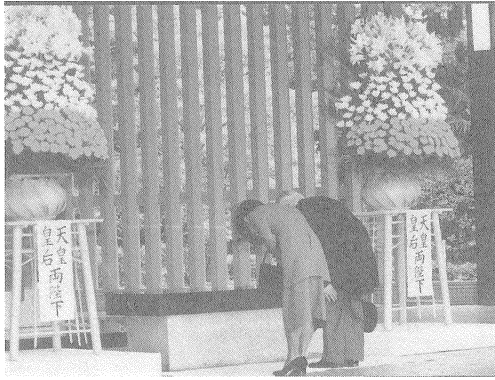


来賓として祝辞を述べる扇千影参議院議長

綿貫民輔会長が、式辞の中で「昭和の時代を、昭和天皇と苦楽を共にした世代が段々少なくなってきたことは、必然の成り行きであります。そういう時代であればこそ、私たちは、昭和天皇の、平和を強く望まれ、生命あるものを慈しまれた御心を後世に伝える義務があります。・・・」と述べられた。また、来賓の扇千影参議院議長は、祝辞の中で、昭和天皇の戦後の御巡幸に触れて感謝の意を表し、「昭和記念館が、昭和天皇の御遺徳を偲び、新たな時代の発展を祈念する場となっていることは、誠に喜ばしい限りと存じます。・・・」と述べられたのは、さすがに



東京レディース・シンガーズの合唱



常陸宮・同妃両殿下御拝礼

千鳥ヶ淵戦没者墓苑

拝礼式

千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会

平成19年度厚生労働省主催の拝礼式が、5月28日(月)、常陸宮正仁親王殿下・同妃華子殿下の御臨席を仰ぎ、新緑に包まれた千鳥ヶ淵戦没者墓苑において厳粛に執り行われた。

と感じ入った次第である。

次いで、祝電等の披露、財団事業功
労者の表彰等があつて、最後に、財団
作製のビデオ「昭和天皇の御生涯」

「激動の昭和」が上映されたが、特
に、戦後の御巡幸のお姿を拝し、感涙
が込み上げてきた。

次いで、第二部は、前田二生指揮、

掃き清められた墓前には、天皇皇后
両陛下御下賜の大花籠が供えられ、約
600名の参列者がお待ちするなか、
定刻12時30分、常陸宮同妃両殿下が御
臨場になられて拝礼式は開始された。

東京消防庁音楽隊の演奏に合わせ、参
列者全員が国歌「君が代」を斉唱し、
次いで、柳澤伯夫厚生労働大臣の式辞
を武見厚生労働副大臣が代読した後、

同省社会・援護局長から手渡された御
遺骨を奉持して、納骨の儀を執り行つ
た。今回、納骨堂に納められた御遺骨
は、旧ソ連、硫黄島、ビスマーク・ソ
ロモン諸島、東部ニューギニア、フィ
リピン等において収集された973柱
で、これにより千鳥ヶ淵戦没者墓苑に
は合計35万2297柱の御遺骨が納め
られたことになる。

納骨の儀終了の後、参列者一同が起
立する中、常陸宮同妃両殿下が墓前
にお進みになって深々と御拝礼、戦没者
の御冥福をお祈りになられた。参列者
一同も両殿下の御拝礼に合わせて拝礼
を行い、その後、両殿下は、一同がお
見送りする中を、遺族に御会釈を賜り

東京レディース・シンガーズによる合
唱、「故郷」「春の小川」など『日本の
四季の歌』11曲のメドレーと「さくら
貝の歌」「青い山脈」など「懐かしい

日本の歌」4曲の合唱、いずれも美し
い国「日本」を表象するメロディーに
暫しうっとり、誠に心温まる催しであつ
た。(飯田正能記)

拝礼式式辞

厚生労働大臣 柳澤 伯夫

本日ここに、常陸宮同妃両殿下の御
臨席の下、戦没者御遺族及び来賓各位
の御参列を得て、千鳥ヶ淵戦没者墓苑
拝礼式を挙行するに当たり、一言ごあ
いさつ申し上げます。

先の大戦におきましては、多くの同
胞が、祖国の安寧を願いながら、苛烈
な戦闘に倒れ、また、戦後、遠い異国
の地でお亡くなりになりました。

これらの海外戦没者の御遺骨を祖国
にお迎えするため、政府におきまして
は、昭和27年度に南方地域へ戦没者遺
骨収集団を派遣して以来、戦没者御遺
族とともに、全力を挙げて御遺骨を取
集してまいりました。戦後60年以上が
経過した今もなお、多くの戦没者の方々
が海外に眠っておられます。こうした
方々に思いを致すとき、一日も早く御
遺骨を祖国にお迎えできるよう、確固
たる決意を持って臨む所存でございます
す。そのため、従前の取り組みに加え、

昨年度より、特に南方地域における御
遺骨について、集中的な情報収集を実
施しております。

ここ千鳥ヶ淵戦没者墓苑に、本年は、
旧ソ連、硫黄島、ビスマーク・ソロモ
ン諸島、東部ニューギニア、フィリ
ピン等において収集いたしました九百七
十三柱を新たにお納めいたします。こ
れにより千鳥ヶ淵戦没者墓苑に納めら
れる御遺骨は三十五万二千二百九十七
柱を数えることとなります。

この式典に当たり、改めて今日のわ
が国の平和と繁栄の礎とられました
戦没者の方々に深く思いを致し、謹ん
で哀悼の誠を捧げますとともに、先
の大戦から学びとった多くの教訓を次
の世代に継承し、恒久の平和を確立すべ
く力を尽くして参りますこととお誓い
いたします。

最後になりますが、千鳥ヶ淵戦没者
墓苑にお眠りになられる戦没者の方々
の安らかな眠りと、戦没者御遺族の皆
様方の御平安を切に祈念いたしまして、
式辞といたします。

ながら御退場になられた。

その後、安倍内閣総理大臣、武見厚生労働副大臣、浅野外務副大臣、関係国のインドネシア共和国、マレーシア諸島共和国、ミクロネシア連邦、モンゴル国、フィリピン共和国、ロシア連邦の各駐日大使、若林環境大臣、木村防衛副大臣、衆参両議院各厚生労働委員長、各政党代表、古賀日本遺族会会長、遺族代表などの献花が行われ、最後に、千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会宮下会長が献花を行って、13時15分、式典は滞りなく終了した。

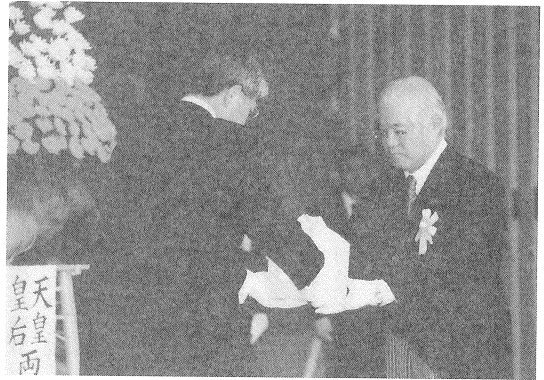
その後、一般参列者や采苑の遺族・慰霊団体等の参拝が相次いだ。

第41回特攻殉国者慰霊祭

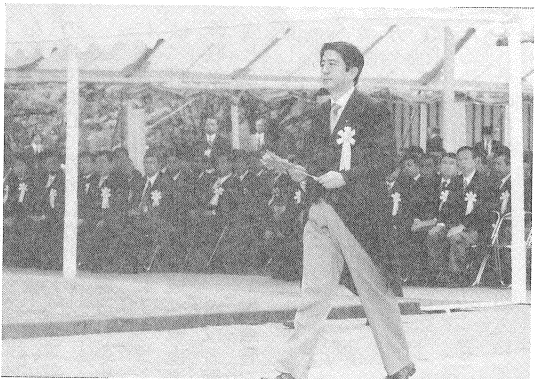
特攻殉国の碑保存会

(長崎県川棚町新谷郷)

第41回特攻殉国者慰霊祭が、去る5月13日、新緑薫る五月晴れの好天の下、長崎県川棚町新谷郷の「特攻殉国の碑」前において厳粛盛大に執行された。同地には、昭和19年海軍臨時魚雷艇訓練所が設置され、同所で訓練を受けた多くの若者により、震洋特別攻撃隊、伏竜特別攻撃隊等が編成され、フィリピ



納骨の儀



安倍晋三総理大臣献花



一般参列者参拝

ン、沖縄等の戦線で果敢な特別攻撃を敢行して散華された3367名の英霊の名を刻した「特攻殉国の碑」が昭和42年5月に建立され、爾来毎年慰霊祭が執行されている。慰霊祭は、新谷郷執行、川棚町支援により、14時から始められたが、今年は、御遺族の御出席が多く、例年の倍に及んだので、出席者は、約390余名に達した。開会の辞に次ぎ一同起立して軍艦旗に敬礼、海上自衛隊佐世保音楽隊の演奏により国歌斉唱、黙祷の後、新谷郷総代・田崎忠男氏、保存会会長・益田善雄氏、来賓代表川棚町長竹村一義氏がそれぞれ

れ慰霊の辞を捧げた後、御遺族始め参列者一同順次拝礼し、最後は全員で「同期の桜」を斉唱して、15時滞りなく式典を終了した

なお、次の第42回慰霊祭は平成20年5月11日(日)に執行の予定である。

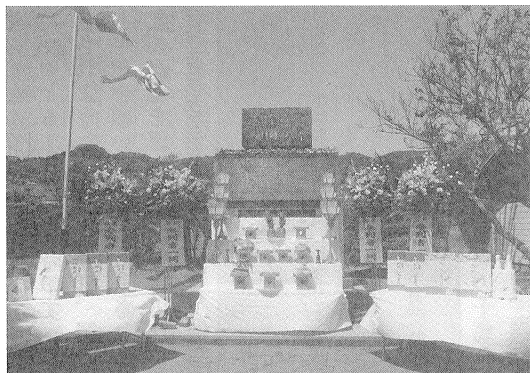
慰霊の言葉

新谷郷総代 田崎 忠男
本日ここに特攻殉国者の慰霊祭を執り行うに当たり、新谷郷を代表し慰霊の言葉を申し上げます。

本日は、御遺族の方々を始め、川棚町長・竹村一義様、町議会議長・初手

安幸様、防衛省関係より第二二航空群司令・山本敏弘様、佐世保地方総監部管理部長・井ノ久保雄三様、長崎地方協力本部長・濱田暢喜様並びに町内はもちろん県外からの御来賓の方々、保存会や新谷郷民の方々多数のご参列を頂き誠に有り難く感謝申し上げます。

振り返れば、戦後62年、最後の特攻兵器と言われた震洋・マル四艇の訓練が、波静かなこの地で行われ、多くの方々が散華されたことなど、何一つ、その痕跡も残されていないこの状態では、すべてが忘れ去られ、風化していくような気がしてなりません。



特攻殉国の碑前祭壇



参列の御遺族

先日岡山から来られた方がありましたが、「最近、自分の伯父が、しきりとこの地での訓練の話をするので、どんな所かと、仕事の都合でこちらに来たので立ち寄らせていただいた」とのことです。「飛行機による特攻については、知覧等にも行ったり、マスコミ等によってもよく知られているけれども、船首に250キロの爆薬を積み込み、敵艦に体当たりする震洋特攻艇のことについては、ほとんど知らなかった」とのことでした。

また、こんな方もありました。「おじいさんが、昭和20年1月28日東支那海で戦死したことは分かっていたが、

この地で、震洋特攻隊の隊員となって訓練を受けていたことは知らなかった。しかし、偶然のことから、この地で訓練を受けていたことが分かり、お参りさせていただいた」という方がおられ、会報をお届けしたところ、次のようなお手紙が来ましたので、今日ここでご紹介し、ややともすれば、風化されそうな戦後62年、祖国の安泰を願ひ国難に殉じられた方々の、あるご家族の今日までを顧みたいと思います。

「私は、101震洋隊・西田隊・伊藤一部原文のまま読ませていただきます。少々長くなりますが、お許し下さい。

円作の孫娘でございます。戦死した祖父は、福岡県鞍手郡中村、現在の若宮市の出身で8歳の時に父親を、その2年後には母親を亡くし、当時18歳だった兄の手で育てられ、26歳で結婚し、小作人として農業や山師を生業としての貧しい生活であったそうです。そうした状況にありながら、34歳で臨時召集、その時8歳を頭に4人の子供と5人目の子を宿している身重の妻を残しての出征でした。この時8歳だったのが私の母で、今年70歳になりました。

戦死した祖父の亡き後、母とその妹は小学校をやめ、二人は子守奉公に出されたそうです。母はその頃の話をよくしてくれませんが、二つ違いの幼い妹は、夕暮れになると里を恋しがり、背中の赤子と一緒に泣き出していたそうです。母はそれを見て、しつかりしなければと思ひ、涙をこらえたことが、今では笑い話になっています。祖母は祖父が戦死した後、壮絶な苦勞を重ねながら戦後を生き抜き、昭和48年57歳で他界しました。

母たちは、祖父の戦死について、「おじいさんは佐世保から船に乗り、戦地に向かっている時に敵の攻撃を受けて亡くなった」と祖母から聞かされた62年間、父親が海軍の特攻隊員だったことや、出征してから半年間、川棚にいたことなどは全く知らずに、長い年月を過ごして参りました。

今回、祖父の曾孫が見た不思議な夢をきっかけに、厚生労働省から祖父の戦歴書を取り寄せて、初めて出征後の足取りを知ることが出来ました。

それが今年新年早々のことでした。その戦歴書の中には、震洋・魚雷艇と書いてありました。私にはすぐに祖父は川棚にいたことが分かりました。その日のうちに川棚に行くことを決めました。1月28日の命日を前にして、祖父や讃岐丸と共に異国の海で国や家族のことを想いながら亡くなられた方々の、声なき声に導かれたような気がしてなりませんでした。1月28日、祖父の命日の日に特攻殉国の碑にお参りさせて頂き、その殉国の碑に刻まれた祖父の名前を確認すると同時に、止めどなく溢れる涙をどうすることも出来ませんでした。」以下、特攻殉国の碑の建立や碑の保存、環境美化・清掃等に対する新谷郷地区への感謝の文を添えて頂きましたが、この手紙を拝読させて頂きながら、隊員の中には、若い予科練や学徒出身者だけではなく、このような方々も沢山おられたのかと思う時、大黒柱であるご主人を亡くし、戦後の厳しい混乱期を過ごされた御遺族に思いを馳せ、目頭が熱くなるのを禁

じ得ませんでした。
 ややともしれば、当時のすべてが風化されようとしている今日、国の安泰と平和を願い、戦場に散華された御英霊の遺徳を偲ぶ時、二度と再びこのよ

軍官学校第七期生会 第十回慰霊祭に寄せて

東京ヤゴダ会会長(軍校7期)
 藤井 弥五郎

今年も春が来て、東京の千鳥ヶ淵の桜も満開となった3月27日、満洲国陸軍軍官学校第七期生会の「第十回慰霊祭」が千鳥ヶ淵戦没者墓苑で厳粛に斎行された。同校の第七期生(以下「軍校7期生」と略称)は、昭和19年12月に、当年度の陸軍予科士官学校、陸軍經理学校予科等の受験生の中から選ばれて東京に集合のうえ渡満し、新京の軍官学校予科に入校した。入校当時、予科生徒隊は、日系2個連(中隊)満系3個連の編成で、日系は375名であつた。昭和20年8月9日ソ連参戦。当時の軍官学校校長は山田鉄二郎中将、生徒隊長は、溥傑皇弟であつた。翌10日、軍事部命令により在校職員生徒をもつて諸兵連合の部隊編成が行われ、

うな悲劇を繰り返さないために、この特攻殉国の碑こそが、唯一の証しでもあろうかと思ひ、特攻殉国者慰霊祭を執り行ひ、顕彰していきたいと思つております。

出動準備を整えた。次いで、13日に学校を出発、各部署に展開し、首都新京防衛の任に就いた。

私達は、対戦車特攻としてソ連軍の戦車を激撃殲滅すべく陣地(通称・蝟壺)構築中、満洲国軍の反乱あり、それに対処するなどして、8月15日の終戦を迎えた。以後は、在満各部隊と同様、ソ連軍により武装解除、次いで、病氣入院中の者その他若干の残留者を除く大多数は、不当にもソ連に抑留され、シベリアはチタ州ブカチャーチャ

とイルクーツク州オルハ村へと送られた。ブカチャーチャでは、主として炭鉱で、囚人(政治犯としてシベリアへ送られたロシア人)と共働での石炭採掘作業とその関連作業を課せられ、後日他所へ、例えば、ウスチウンドゥールガ等へ転属して森林伐採作業に、あるいは、コクイへ転属して、その地区の産業である造船業に従事させられた者もいた。オルハ村では、鉄道敷設作業と森林伐採作業が主で、共に極寒(時には零下60度にもなる)と飢えに

どうか御英霊の皆様、永久に我が国の発展と平和を見守り頂き、御遺族の皆様並びに御参列の皆様方に御加護を賜りますようお願いいたしますとともに、謹んで殉国の御霊の安らかな御冥

苦しむ劣悪の環境下での重労働に従事させられた。

死没者は、オルハ村で1名、ブカチャーチャでは、石炭積込み中の事故死1名、栄養失調と疫病による死没者が57名、罹病のため軍の病院に転送療養中、ペトロフスク・ザバイカリスキー病院で8名、ヒロク病院で2名、カリームスカヤ病院で9名、ポリシヨイネーベル病院で5名の合計83名の死没者を出した。

奇しくも生存した軍校7期生は、昭和22年春から24年秋にかけて、ようやく帰国することができた。ソ連崩壊により、抑留中の死没者の遺骨収集が可能となり、平成3年より15年間にわたつて政府による遺骨収集事業が行われてきたが、抑留中死没者の政府公表は5万5千人、内遺骨収集数は、平成18年10月1日現在で、約30%の1万6577柱である。残り約70%の、今後の遺骨収集は、多くは望み薄である。その理由は、既に全ソ連地域の埋葬

福をお祈り申し上げ、慰霊の言葉いたします。

平成一九年五月一三日

地調査の結果、収集可能な埋葬地の遺骨収集は終わつており、現実には、埋葬地と判つても、埋葬場所を特定するのが困難で、情報や記憶を基に試掘を重ねても、遺骨が発見できない。

日本人埋葬地と記録資料に記載があつても、既に整地されて工場建設の敷地となり、あるいは農地や宅地として住宅・車庫・工場が建てられたり、道路が埋葬地を貫通して、遺骨が散乱した埋葬地もあり、ロシア人墓地に侵食された埋葬地も数多い。

森林伐採、鉄道敷設等、移動しながらの作業の場合、該当地での埋葬者も少なく、埋葬地も小規模で、奥地の森林地帯であるため、目標物もなく、付近の様子も一変して、60年余も経過した今となつては、埋葬地自体の発見が不可能に近い。ウズベキスタン共和国等、宗教上の理由で、遺骨収集が許可されていない地域もある。私が、1992年の遺骨収集以来、同期の死没者のほとんどが埋葬されたいるチタ州に、毎年夏の

期間滞在し、ボランティアで、遺骨収集のロシア側責任者と親交を深め、ロシア側で保管している埋葬地資料を基に、遺骨収集の実態を、自分なりに、現地で詳細に調査した結果によると、残念ながら、軍校7期生の死没者の内、オルハ村で死没の1名、カリームスカヤ病院で死没の2名、ヒロクの病院で死没の9名の内、昭和22年10月以降の死没者4名については埋葬地も不明であり、抑留中死没者83名中7名は未だシベリアの大地にあり、遺骨は未帰還のままであって誠に残念である。

さらに、軍校7期生の死没者を含むブカチャーチャ埋葬地については、埋葬者731名中、未発見、収集不可能の残留遺骨は42柱あり、ヒロク埋葬地については、埋葬者125名中22柱が収集不可能で、合計64柱が収集不可能の遺骨で、未帰還になっていることがロシア側の資料を基に、その実態が判明した(本資料は、遺骨収集・ロシア側行政機関の特別資料で、ロシア政府より日本政府に渡されているが、日本では非公開になっているため、実態は掴めない)。

料を基にしたの私自身の調査から、収集不可能の残留64柱中に5〜8名の我が同期生が含まれており、前記のカリームスカヤ2名、ヒロク4名の収集不能の遺骨を加えて、11〜14名の同期生が未だに帰還できず、埋もれたままで、御霊はシベリアの大地を彷徨い続けている。誠に慚愧に耐えず、ひたすら冥福を祈るのみであり、正に悲劇である。しかし、これがシベリア抑留の真実、実態なのである。

私の遺骨収集参加は、前述のように、シベリア滞在中の現地採用ボランティア参加がほとんどで、そのまま現地に留まることが多く、収集団と同行帰国していないので、収集団が当時、どのような帰国報告をされたか分からないが、当時はソ連が崩壊し、半世紀を経たの遺骨収集であって、「収集」の成果のみが強調報告されて、負の部分の事実は、判つていても全く報告されず、負(影)の真実は隠蔽され、抹殺されていると思つている。

私のロシア側保管資料を基にした調査から「埋葬地の登録埋葬者」全員を収骨できた埋葬地は、ごく僅かで、ほとんどの埋葬地が、収骨不可能で、未収集の遺骨が相当にある。その真実はソ連時代であり、抑留者が未帰還時代、抑留者によって埋葬し

た当時、収容所ごとに埋葬図面を作り、内務省で管理して、検査があったとの記録もあるが、抑留者が帰国後、ソ連政府が管理放棄した結果、盗掘、洪水による流出、工事による水没、道路工事による破壊、農地・宅地のための整地、野獣による破壊、ロシア人墓地による侵蝕等であり、この真実は全く報告されていないので、該当埋葬地の遺骨は全部収集されて焼骨をし、遺灰の中に肉親のもあると誤認して一部を持ち帰り、家族の墓に埋葬した例もある程で、収集団が力不足で真実を知らなしか、敢えて報告をしないか、いずれにしろ、罪作りな話である。

したがって、収集不可能の実態が報告されないで、該当埋葬地の遺骨は全て収骨され帰国したものととして、遺骨収集は完了とされている。ロシア側の提出資料に対し、収集実態結果の検討の不備か、収集団の報告の欠落か、事情は判らないが、収集できていない遺骨があることは事実であり、真実は記録に残し、公にして、真実を日本人が知ってほしい。これが慰霊に繋がることと思つている。

負の影に隠され、語られもしない死者は、現在でも極寒の凍土に凍つき、夏の太陽に呻き声を上げるほかなく、肉体はシベリアの土となって永遠

を過ごす。

憤死した死没者の霊は彷徨い続けるのみである。せめて慰霊碑をと、我々の同期生の死没地6箇所慰霊碑を建立し、また、チタ市の瀟洒な丘に「ソ連抑留中死没者」を対象とした慰霊碑を、他の抑留战友会、同期生並びに御遺族、多くの方々浄財により建立し、毎年現地の清掃と慰霊を行っている。

遺骨収集の一連の経過を述べると、
①埋葬地調査(埋葬地の確認、埋葬遺骨の確認、遺骨収集の現地政府の承諾の有無、収集団の作業と生活面の諸条件確認等)
②年度初め収集埋葬地・担当収集団長決定により団長現地訪問、行政府と細部の打合せを実施。
③必要に応じて収集団本隊より一週間前に先発隊が現地入りし、本体の受入れ準備をする。以上で遺骨収集過程の90%が終了する。残り10%の部分に収集団が入る。

遺骨の発見・発掘の力作業の終了後における、御遺体の骨上げ、焼骨、袋詰め、梱包等をロシア人夫婦の協力を得ながらの作業が大半で、遺骨収集の成果の部分にのみ関わるだけなので、負(影)の部分に関わることなく、知らないためか、関心がなく、報告は、収骨の経緯と成果の喜び、誉め話のみで終わり、迎え聞く方も、報告の範囲

に止まり、労をねぎらうことで終わってしまふ。現実を知る者にとつては、悲しい限りである。

遺骨収集に際し、埋葬地調査から収骨まで総てに関わり、一人の埋葬者の発見から全員を発見・発掘するため、試行錯誤を繰り返し、重ねる苦労は解つてもらえず、残念で寂しいが、遺骨収集の喜びの陰に取り残され、収集できない彼ら(御遺骨)がいることに思いを馳せ、忘れないで欲しい。

彼ら(御遺骨)こそ、正に慰霊の対象である、と心を痛めるのである。

○千鳥ヶ淵戦没者墓苑儀式について

先般、国のために派遣され、大変な御苦勞を重ねて、海外派遣から帰国した自衛隊の隊員に、政府代表の担当大臣が出迎え、その勞をねぎらったが、当然のことである。

遺骨帰国時の、千鳥ヶ淵戦没者墓苑での儀式は、戦争により犠牲になった命、国のために捧げた命のお帰り・お迎えの聖なる儀式であり、かつまた、未だ異国の地に眠る命の冥福を祈り、追悼する厳肅な儀式であるべきではないかと思うが、その正式名称は「遺骨引渡し式」という。千鳥ヶ淵戦没者墓苑で、遺骨収集団が政府・厚生労働省の担当係官に収集遺骨を見せる場ではない。収集団も「○○埋葬地から、

○柱収骨し、持ち帰りました」と報告し、迎える政府側も、収集団に対しその勞を労う、そんな場ではない。

時の流れの違いとはいえ、海外派遣から帰国の自衛隊員を、担当大臣が出迎え、一方、戦争の犠牲となった命の帰国に、大臣も担当課長の姿もなく、代行係長では、余りにもその処遇が、悲しく、虚しく、寂しい思いである。○シベリア死没者慰霊活動について

ソ連時代、埋葬地管理を放棄し、埋葬地は存在しないと隠蔽した結果による、収骨できない死没者の冥福を祈り、御霊を慰める活動を、同期生の死没地を中心に、各埋葬地に、有志を募つて慰霊碑を建立し、その趣旨を説明して、平成13年に、それぞれの埋葬地で、(財)全国強制抑留者協会主催の墓参団により除幕式を実施した。

◇同期生並びに所属戦友会との慰霊活動

①1992年 ブカチャーチャ抑留者戦友会ヤゴダ会は、同所第二墓地(通称一本松墓地・埋葬者731名、内軍校7期生58名)に慰霊碑を建立。
②1996年 チタ平和祈念碑建立日本委員会(東京ヤゴダ会)は、チタ市内に、ソ連抑留中死亡者を対象とした慰霊碑を、他の抑留戦友会、関係先、知人等の協力を得て、その敷地面積約

3000㎡の整備と共に建立。
③2001年 東京ヤゴダ会有志は、軍校7期生で後送病院に転送され療養中死亡した者の埋葬地、ペトロフスク・ザバイカリスキー墓地(埋葬者275名、内軍校7期生8名)、ヒロク墓地(埋葬者125名、内軍校7期生5名)、カリームスカヤ墓地(埋葬者176名、内軍校7期生2名)、ポリシヨイネーベル墓地(埋葬者92名、内軍校7期生5名)にそれぞれ慰霊碑を建立。

④2001年 オルハ村抑留の軍校7期生有志は、オルハ墓地(埋葬者2名、内軍校7期生1名)に慰霊碑を建立。
◇厚生労働省直轄の遺骨収集事業

1992年〜2002年の間、遺骨収集のための現地との交渉と準備、遺骨収集先発隊として本隊受入れ準備、遺骨収集等12回(内正式団員としての参加は3回、あとの9回は、チタ市に滞在中の参加のため、現地採用ボランティア)、延べ154日間の参加。
◇チタ州埋葬地調査(同期生松岡忠雄君同行)

厚生労働省より全国強制抑留者協会への委託事業として調査
1999年(9月〜10月) 15日間
2001年(6月〜7月) 26日間
チタ州15箇所(6箇所)の埋葬地について、抑留中死亡者の埋葬地点の調査を実施し

た。まだ未発見の埋葬地があり、前述の理由で、調査発見は、情報が乏しくて困難が多く、難渋している。
本年も6月から秋にかけてチタ市にホームステイして、遺骨収集に関わる埋葬地調査を、御遺体発見に向けて、遺族と同行の予定を組み、例年継続しての慰霊碑保全・管理活動を予定している。

◇チタ州・イルクーツク州・プリモリスク地方慰霊碑調査(同期生茨木治人君同行)
2004年(7月) 13日間
2005年(8月〜9月) 14日間

厚生労働省より(財)偕行社への委託事業として、民間建立慰霊碑等の調査を、連日移動しながら調査した。
近年、抑留経験者は高齢化して、各戦友会は次々と解散の傾向にあり、埋葬地も放置されたままであり、抑留経験者や遺族が建立した慰霊碑も、風雨に曝されて荒れた状態のまま佇立している。調査状況は、報告書にまとめて厚生労働省に提出されており、製本したものを、靖國神社の「靖國偕行文庫」に献納した。

◇
日本政府を始め、関係者の長年の努力にも拘わらず、永久に帰国できない御遺骨に心を痛め、敢えて遺骨収集の

負の部分語り、より多くの人々にシベリア抑留の実態とその犠牲者が今なお帰国できない真実を知ってもらい、彼らを決して忘れないでもらいたい。各種団体の慰霊祭その他の慰霊行事は数々あるが、何故か成果の綺麗事のみが強調され、時には未収集未帰還になっている御遺骨があるにも拘わらず、自分たちが収集して持ち帰り、その御遺骨は千鳥ヶ淵戦没者墓苑に眠っている」とまで言う、収集の実態を認識していない、不用意な話を聞く。事実を公にしないことの悪因であろう。

遺骨収集の実態を無視し、未だに凍土に取り残されてシベリアに眠る死没者を、無視冒瀆も甚だしく、悲しい限りである。影の負の部分に素直に心し、そこに触れることを忘れないで欲しい。現実を素直に受け止めることが死没者へのはなむけであり、追悼・慰霊の本懐と思う。

◇抑留実態の絵画・抑留者が過酷な労働に耐えて建てた建造物・シベリアに建つ民間建立慰霊碑の展示

◆ 本年の軍校七期生会の慰霊祭では、一般の方々に抑留の実態を知ってもらうべく、次の展示品を、参拝者に向けて展示した。

① 関係埋葬地の遺骨収集状況の写真と埋葬墓地図及び遺骨収集実績表
 ② 全国強制抑留者協会保管の吉田勇氏の抑留実体験を描いた絵画
 ③ チタ州・イルクーツク州の埋葬地等に現存する民間建立慰霊碑の写真
 ④ 極寒と飢えに耐え、日本人の誇りを失うことなく、日本人の手によって建造し、現在もお健在でロシア人の評価も高い、各地の病院・駅舎・公共建築物・劇場・マンション・住宅等の写真

◆ これらの写真・絵画を見て、抑留の実態を知り、抑留者が過酷な環境と労働の中でも、皆が力を合わせ、日本人としての誇りを失うことなく、見事な建築物を造り、今なお健在であることが、現在の多くの日本人が知ることが死没者の追悼・慰霊に繋がると思う。

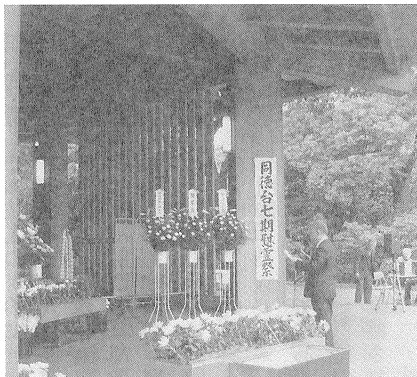
◆ 抑留の過酷、重労働、飢えと極寒等を語る印刷物、写真、漫画描写の数々は一般的であるが、抑留者の労働の跡を語り、60年を経て今に残る建築物の姿は、日本人が歯を食いしばり、涙を堪えて生きた証であり、力尽きて斃

れ、60年を経た今もお凍土に眠り続けている真実、彼らを思う仲間がいることの証でもあることを語る「慰霊碑」の姿など、ほとんど紹介されていない。今後とも多くの人々に、明らかにされていない真実を伝えるべく活動を続けて、永遠に帰国が望めない彼らの生涯の追悼としたい。

抑留中死没者の冥福を祈って 合掌



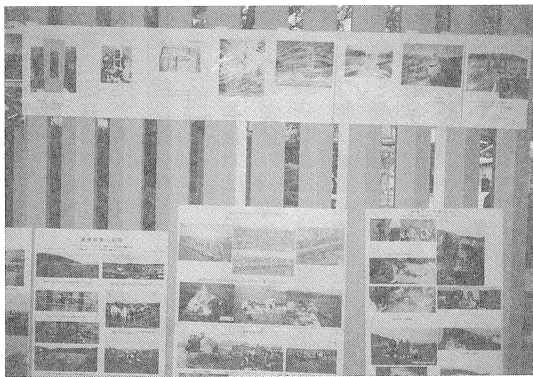
御遺影掲示



追悼の辞 (同期生池田秀夫君)



強制抑留実体験絵画等展示



慰霊碑写真展示

協議会参加団体の紹介

⑤ 特定非営利活動法人

ジェイワイエムエイ

英文表記「Japan Youth Memorial Association」

略称「NPO JYMA」

【団体の沿革・目的】

「一 我々は実に多くの困難を克服して、一途に今は亡き英霊の御遺骨を日本にお連れすることと旧戦域における民生向上事業を目的とする。

二 如何なる困難が我々の前に立ち塞がるうと、けつして初心を挫くことなく、最後の一棘たりとも本国にお迎えするのだということを中心に銘記しなければならぬ。(以下略)」これは、特定非営利活動法人ジェイワイエムエイ(以下「JYMA」と略称)の遺骨収集派遣隊員の誓約書の一節である。かような固い決意と崇高な使命感を持つて、しかも費用の一部を負担してまで極めて困難な遺骨収集作業を行う隊員を派遣し、支援するJYMAとは、旧日本青年遺骨収集団、平成14年9月に東京都知事の認証を受けてNPO法人化され、「特定非営利法人ジェイワイエムエイ」として先の大戦の全戦域に

遺骨収集隊を派遣し、精力的に収集活動を進めるとともに、旧戦域における民生向上のための支援活動その他の国際協力・平和推進活動等も併せ行っている志ある青年・学生主体の組織である。昭和43年9月の第1次派遣から平成17年度の第226次派遣(平成18年2月)までに、延べ1353名を、延べ4448日間派遣し、14万9034柱の御遺骨の本国帰還を成し遂げている。なお、参加学生の大学は、80数校に及んでおり、平成18年度も既に10数次にわたり、シベリア、モンゴル、硫黄島、ソロモン、パラオ諸島、インドネシア、東部ニューギニア、フィリピン、沖縄等へ派遣し、精力的な活動を続けている。戦後60有余年を経て、戦地経験者の高齢化と減少、戦跡等の状態の著しい変化、戦争体験の風化等困難な状況下にあつて、英霊の慰霊顕彰事業を次世代に継承し、国際協力と平和推進に貢献しようとする、志あるこの若者達の組織は、誠に頼もしい限りであり、日本人の誇りである。

【団体の主要事業】

定款第5条(事業) この法人は、第3条の目的を達成するため、次の特定非営利活動に係る事業を行う。
1 アジアの都市型スラム地区における公衆衛生指導事業

2 戦没者及び抑留中死亡者の遺骨収集事業
3 戦没者及び抑留中死亡者の慰霊巡拝事業
4 国際協力活動や平和推進活動に関する普及事業

【組織の概要等】

1 (会員及び会費等) 定款第6条、第8条
正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人及び団体
賛助会員 この法人の事業を援助するため入会した個人及び団体
準会員 この法人の目的に賛同して入会した国外の個人及び団体
名誉会員 この法人に功労のあつた者、または学識経験者で、總會によって推薦された者

2 (定款第8条) 会員は、總會において別に定める入会金及び会費を納入しなければならない。
3 (役員) 定款第13条 この法人に次の役員を置く。
理事 3人以上10人以内。理事のうち、1人を理事長、1人を副理事長とする。
監事 1人以上2人以内

2007年度ジェイワイエムエイ役員(理事会)
理事長 赤木 衛
副理事長 米津 等史
理事 石澤 興二 成行 広太
監事 永野 隆治

団 長 渡久地 政見
事務局長 橋本 真澄
学生代表 村山かおり
学生副代表 石垣 拓真 宮崎 貴裕
(顧問)
英霊にこたえる会会長 堀江 正夫
日本会議副会長 小田村四郎
衆議院議員 平沼 赳夫
前衆議院議員 衛藤 晟一
衆議院議員 西村 真悟
参議院議員 田村 秀昭
株式会社アーバンコミュニティ代表取締役社長執行役員 石川 裕一

【その他】

なお、本会では、事業の継続的運営のための資金の一助とすると共に、広報活動の一環として、月刊広報誌「遺烈」及び年次活動報告書「今、何を語らん」を発行しておりますので、多くの方に是非講読維持会員となつて御支援を賜りますようお願いいたします。
個人講読維持会費・年間 一〇〇〇〇円以上

法人講読維持会費・年間

二五〇〇〇円以上

【事務局】

〒103-0024

東京都中央区日本橋小舟町1-6

岡常小舟町ビル5階

電話 03-3662-0005

FAX 03-3662-0006

郵便振込口座名義

「JYMA事務局」

口座番号

「00110-3-6688」

◇JYMAの遺骨収集派遣団員の所感(18年度)

私たちに残されたことを

国士館大学3年 安齋 慶

私の硫黄島派遣の参加は、前回の第二次派遣に続けて二度目となる。

前回の派遣は、私にとって大きな体験であり、心に残るものだった。しかし、欲を言うと、私は自らの手でご遺骨を収集することが出来なかったことがとても残念で、まだまだ学ばなければいけないことを学んでいない気がした。だからこそ、平成18年度の締めくくりである今次派遣では、是非自らの手でご遺骨を内地へお迎えしたい、という想いであった。

硫黄島は、埼玉の入間基地からC-1輸送機で、厚木を経由して約2時間半の道のりだ。島に降り立った瞬間にまた、あの独特の空気に包まれた。

硫黄島では、南国特有の植物や天然記念物、中には絶滅危惧種の鳥もおり、この時期になると、近海ではザトウクジラが回遊している。小笠原村の方が仰っていたのだが、この島は過去に戦争がなかったら、今頃は世界遺産に登録されていただろうとのこと、そのくらい美しいのだ。しかし、一見平和そうに見える小さな島だが、一回来ただけでは回りきれない程の戦跡がある。戦争の爪痕はしっかりと残されていた。

作業では、一日目からご遺骨を収集した。また、釣り場を探していた在島隊員の方々によって、たまたま地表骨が発見された。62年もの間、風雨にさらされていたことを思うと胸が痛む。今回は、作業の場所的にも、1柱も収集出来ないかもしれないと、初めに聞かされていたので驚いた。

そして、2月17日、漂流木海岸上上で、約15年振りとなる未調査の大規模な壕が発見された。前回の派遣で、私も調査で歩いた山の3メートル程下から、その壕は現れた。米軍が戦後、土砂で上から塞いでしまったのだろう。硫黄島協会の福田さんが私に言った。

「安齋君、これが本当の壕だよ。」それはとても信じられない光景だった。あちこちにご遺骨があり、足の踏み場もないといつていい程、無残なものだった。中には完全な状態で、仰向けになつて寝ていたご遺骨が発見された。18日は休日となっていたので、この壕の作業は19日から始まったのだが、奇しくもその日は、62年前に米軍が上陸した日。この偶然は、私たちに何かを訴えて掛けているようだった。開口時は70度

Cくらいあった壕内も、ガスがすっかり抜けていた。とは言っても、中での作業はとても暑く息苦しいもので、数分で煤と汗まみれになり外に出る。水が無くては耐えられないとつくづく思った。箕俎リレーの先頭での土砂の掻き出しは、慎重かつ丁寧に行わなければならない。ご遺骨を傷付けないように、土砂を箕俎の中に入れる。スコップだけだと、隅に残骨の混じった砂が残ってしまうので、手でそれを掻き集めた。

また、外のご遺骨の分別作業も、とても神経を遣うもので、土砂の中には木や鉄屑なども混じっており、脆くなつたご遺骨の欠片と間違えやすい。決して見落とさないよう、私は軍手を外して、素手で見極めた。結局、この壕の中には59柱のご遺骨が眠っていた。今次派遣だけで69柱、平成18年度の全派

遣を通して計84柱のご遺骨を内地に迎えることが出来たのだが、ご遺骨を大切に捧持しながら入間基地に降り立った時「お帰りなさい。長い間ご苦労様でした」と、何度も語り掛けた。

千鳥ヶ淵墓苑でのご遺骨引渡し式では、大勢のご遺族の方々が献花をされる様子を見て、涙が止まらなかった。私は、その光景がとても嬉しくて、とても悲しかった。

2週間ほぼ毎日、多くのご遺骨を収集する。そんな非日常的な生活の中で私は多くのことを学び、考えた。62年前の戦争は、今の世に一体何を残したのだろうか。高校の授業では近代史の戦争や大東亜戦争について、それほど深くは学ばない。それでいいのだろうか？喉の渇きや飢えの苦しみに耐えながらも戦い、大切な人や家族を想いながら散っていった先人たちを、今度は私たちが想い、行動で示すべきではないだろうか？

世界中では、今も戦争や紛争によって多くの命が失われている。戦争により悲劇を味わった日本人の血を引く者として、父親の背中を見ずに強く生き抜いた日本人の子孫として、私たちが若者が世界を見据え、命の尊さを再認識しなければならぬのではないか。私たちが日本人なのだから。そのため

私は、遺骨収集活動にこれからも参加していききたい。そして、家族や友人など周りの人達にはもちろんのこと、この想いを後世に繋げていこうと思う。最後に、今回の硫黄島派遣に際し、ご指導・ご支援下さいました派遣団員の皆様を始め、関係者各位、全ての方々に深く感謝いたします。

硫黄島遺骨収集に参加して

東京歯科大学

大学院2年 染田 英利

今回、硫黄島での戦没者遺骨収集事業に、第三次派遣隊員として参加させていただいた。実は、私は現職自衛官である。職種は歯科医官で、現在東京歯科大学大学院に研修のため出向している。大学院での研究テーマは歯や骨についての鑑定である。私が、遺骨収集に参加したいと考えたのは、普段から書籍等で遺骨の回収について勉強しているもの、実際の経験がないため、遺骨収集について実際に実務を経験したいということであった。

なぜ現職自衛官が、自衛隊も参加する硫黄島での遺骨収集にJYMA卒で参加するのか？と疑問に思われるかもしれないが、自衛隊外に出向しているということは、逆に自衛隊での活動に

参加できないのである。赤木理事長にその事情をお汲み取りいただき、参加させていただけることとなった。

第三次派遣隊では、16年振りとも言われる大規模な壕や、断崖上の陣地跡での収集作業を経験することができた。遺骨の風化は、その遺骨が置かれた場所の状況により大きく左右されると言われている。硫黄島のような亜熱帯性気候の地表で風雨にさらされるような場合、あるいは壕の中であつても、硫黄つまり酸性の強い土壌に埋もれているような場合は、教科書的には遺骨の風化が進みやすい環境であると言える。しかしながら、今回実際、地表骨や壕の中の遺骨を取り上げてみて、予想以上に保存状態がいいことに驚いた。当時の状況をそのままに伝えるご遺骨の状況を目にし、英霊の皆様の当時のお気持ちに思いを馳せながら、ご遺骨を取り上げた。教科書と現場には開きがあることを思い知らされた。やはり実際の経験は大切である。実際の収集作業においては、ご高齢であるご遺族の方々が先頭に立って、高温の壕内において、土壌の掘削、運び出し、遺骨の回収等々の一連の収集作業に取り組んでおられることに驚かされた。体力的なこともあるが、そのモチベーションの点においても感銘を受けた。ご遺族の

故人を想うお気持ちご遺骨を大切に思う気持ちに繋がり、それが遺骨収集活動へ自ら参加する原動力となっていく、という日本人の行動様式の文化的特徴に触れることができたように思えた。

私は、数年前に米軍での戦没者遺骨収集・身元鑑定機関で研修を受けたことがある。一般的に、米国人の遺体(遺骨)に対する執着心は日本人程強くないと言われている。もちろん遺族とは直接遺骨収集に参加するということはなく受身である。しかしながら、米政府は、国のために犠牲となった英雄に対し、国家が最後まで敬意と責任を持つことを国家として明確に示すため、莫大な予算を掛けて専門機関を設け、組織的かつ大規模に遺骨収集と身元確認を行っている。それは国家の有り様にも繋がることであるとも言える。

その米国に比べてみると、日本の戦没者遺骨収集は、遺族が主体で政府側の対応が後追的な印象を受ける。それには、こういった両国の文化的な違いが背景にあると言えよう。今後、日本の遺骨収集事業は、その原動力となっていた遺族会の高齢化により転換期を迎えるであろう。政府には、ご遺族の気持ちを引き継ぎ、国家の姿勢として主体的に取り組んでほしいと考える。

3月2日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑にお

いて、遺骨引渡し式が行われた。かなりご高齢と思われるご遺族の方が、深々と頭を下げて「有り難うございました」とのお礼の言葉を掛けて下さった。この言葉に込められた思いを深く受け止め、私も国民の一人として、今後も戦没者慰霊に心を尽くさなければならぬことを胸に刻んだ。

今回の派遣について振り返ってみると、遺骨収集の実際を経験できたことに加え、遺族会、硫黄島協会、旧島民の会、厚生労働省の皆様の遺骨収集に取り組み姿勢の中に、日本人の文化面について学ぶことができた。このような貴重な機会を与えていただいたこと、関係各位に感謝申し上げます。



千鳥ヶ淵戦没者墓苑での遺骨引渡し式

暑中お見舞い 申し上げます

財団法人

名誉総裁

会長

副会長

同

同

同

理事

大東亜戦争全戦没者
慰霊団体協議会

三笠宮崇仁親王殿下

瀬島龍三

堀江正夫

新庄鷹義

岩下邦雄

斎須重一

柚木文夫

財団法人

会長

副会長

同

同

同

理事

事務局

山本卓真

斎須重一

塩田重章

福田一彌

菊地勝夫

財団法人

会長

副会長

同

同

副会長

兼理事

事務局

佐久間文雄

岡部文雄

出雲紀芳

市川國雄

林崎千明

夏川和也

池田正男

航空自衛隊退職者団体

新生つばさ会

会長 杉山 蕃

副会長 横澤 彰夫

同 後藤 龍一

同 押尾 泰行

同 八藤後 剛輔

同 津曲 義光

事務局からの報告

○理事会・評議員会の開催

平成19年4月19日及び20日、当協議会の平成19年度第1回理事会及び同評議員会をそれぞれ開催した。両会議とも概ね同一内容の議案が事務局から提議され、それぞれ真剣な討議を経て、原案どおり承認された。

なお、今回は、当協議会設立以来初めての役員等改選の時期に当たり、数名の新役員等の選任のほか、大多数の役員等の再任が諮られ、承認された。

◇理事会

(開催月日)
平成19年4月19日(木)

(開催場所)

千鳥ヶ淵戦没者墓苑会議室
(出席者)理事11名全員(委任状出席2名を含む)、監事1名、事務局1名

(議長)

新庄鷹義副会長

(主要審議事項)

①平成18年度事業報告

②平成18年度決算報告

③平成19年度事業計画

④平成19年度予算

⑤役員等人事案件

◇評議員会

(開催月日)

平成19年4月20日(金)

(開催場所)

千鳥ヶ淵戦没者墓苑会議室

(出席者)

評議員15名全員(委任状出席3名を含む)、監事1名、事務局2名(議長)
野口清秀評議員
(主要審議事項)

理事会に同じ。

○参加団体連絡調整会議の開催

当協議会では、首都圏所在の参加団体による連絡調整会議の開催を年2回予定しているが、本年度第1回の連絡調整会議を、平成19年5月14日(月)に開催した。

当日は、折悪しく春季の慰霊行事と重なり、欠席の団体も多かったが、各団体の活動状況等について活発な意見交換がなされ、互いに啓発されるところの多い会同となった。

(開催場所)

千鳥ヶ淵戦没者墓苑会議室

(会議出席団体)

海原会

興亜観音を守る会

震洋会

全国甲飛会

太平洋戦争戦没者慰霊協会

千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会

東京ヤゴダ会

特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会

陸士第五十七期同期生会

JYMA

(主要協議事項)

①本年度の「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」の実施について

本年度の合同慰霊祭実施要領について、当協議会が準備中の計画概要を説明し、各団体の意見・要望を求めた。特に、本年度は協議会参加団体全団体を主催団体とすること、協議会からの案内は、首都圏(東京、千葉、埼玉、神奈川)在住会員に案内の範囲を広げること、6月20日締切りで参列者を整理すること等について合意を得た。

②当協議会の理事会・評議員会の結果について

平成19年4月19日及び20日に、それぞれ開催された当協議会の理事会及び評議員会の審議内容、特に、本年度の

事業計画と新役員等の人事について、当協議会から説明し、今後の協力をお願いした。

③各団体からの意見等 各団体の現況と今後の慰霊事業の在り方について意見を交換した。

○参加団体幹事会の開催

平成19年3月16日(金)、当協議会は第2回参加団体幹事会を開催し、本年度の合同慰霊祭の実施要領等について意見を交換した。
(会議参加団体)

海原会・英霊にこたえる会・太平洋

戦争戦没者慰霊協会・千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会・特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会

平成19年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭のお知らせ

当協議会は、参加諸団体と共に、本年度の「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を、平成19年7月7日(土)12時から靖国神社において催行致します。既にご案内は、首都圏ご在住の賛助会員の皆様には差し上げておりますが、その他のご参拝ご希望の方は、電話又はFAXでご連絡下さい。
(連絡先)

(財)大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会事務局
電話 031540511838
FAX 031540511839
(参考) 参加費用
玉串料 二〇〇〇円
直会参加料(参加者のみ) 五〇〇〇円

財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会 新年度役員等一覧

(あいうえお順)

- 名誉総裁 三笠宮崇仁親王殿下
- 会長 瀬島 龍三
- 副会長 堀江 正夫 新庄 鷹義
- 理事 岩下 邦雄 齋須 重一
- 理事 柚木 文夫(常勤)
- 理事 秋山 眞一 小田原健児
- 理事 菅原 道熙 林崎 千明
- 理事 益田 善雄 福田 一彌
- 理事 宮崎 忠夫 村木 鴻二
- 理事 植田 弘 竹之下和雄
- 理事 赤木 衛 新井 剛
- 監事 新井 光雄 池邑 正男
- 監事 内田 十允 菊地 勝夫
- 評議員 倉谷三男四郎 倉林 和男
- 評議員 栗原 宏 桜井 房一
- 評議員 奈良 保男 野口 清秀
- 評議員 備後 嘉雄 松島トモ子

【正会員】 東京ヤゴダ会

【賛助会員】 (あいうえお順)

- 森田 次夫
- 板垣 正 大久保 隆
- 山下 敏郎 羽佐間重彰
- 相談役 (財)借行社会長
- (財)水交会会長
- 新生つばさ会会長
- 参与 住友 勝一 寺島 芳彦
- 横溝 潔
- 間部 香代 新 朝一
- 飯田 武 板垣 昭二
- 市瀬 文 人 茨木 治人
- 岩崎 安 大河内 昭夫
- 岡本 章 小川 文代
- 久保 守 人 古賀 寛
- 滝沢 徳隆 平松 靖
- 吉江 正春
- 内田 十允



新入会員及び寄付者

(2月23日～5月31日)

当協議会会員

「ご入会のご案内」

当協議会におきましては、慰霊事業の永続をはかるため、なるべく多くの方々の会員ご加入をお待ちしております。

皆様のご協力をお願い致します。会員の区分と年会費は次のとおりです。

- 一 賛助会員 (本会の趣旨に賛同する個人) 年会費 三〇〇〇円
- 二 賛助特別会員 (特別ご芳志の賛助会員) 年会費 五〇〇〇円
- 三 正会員 (本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人) 年会費 一〇〇〇〇円
- 四 特別会員 (本会の趣旨に賛同する法人・団体) 年会費 五〇〇〇〇円